医療ソーシャルワーカーが行うアセスメントの特質に関する研究
－クライエントの「動機づけ」及び「問題解決への取り組み能力」とソーシャルワークスキル活用の関係－

松（まつ）　本（もと）　葉（よう）　子（こ）

〈要　　旨〉

本研究の目的は、医療ソーシャルワーカー（以下 MSW）が行っているアセスメントとスキルを明らかにすることである。従来のアセスメント研究は、ニーズや問題のアセスメントに焦点が置かれており、クライエントの動機づけや問題解決能力のアセスメントについてはほとんど明らかにされてこなかった。

本研究では、ある大学病院の５人の MSW にインタビューと質問票の調査を行い、円滑に進むケースと円滑に進まないと感じたケースについて分析した。MSW はクライエントの問題解決能力の３側面（①認知とコミュニケーション、②感情、③行動）についてアセスメントし、クライエントの強み（ストレングス）を見つけ、介入していることがわかった。また、MSW は円滑に進むケースより円滑に進まないと感じるケースにスキルを多用していた。スキルについては、円滑に進むケースは「現状確認」「将来のイメージ作り」「情報提供」の３つを主に使っており、円滑に進まないと感じたケースでは「現状確認」のスキルを使いながらクライエントの志向性をアセスメントし、幅広いスキルの活用をしていた。さらに、MSW の経験年数により、使用するスキルが異なる結果であった。

本調査から MSW は、現状確認のスキルを使用しながらクライエントの問題解決能力を多面的にアセスメントし、同時並行的にクライエントの志向性をアセスメントしていることが分かった。

〈キーワード〉
医療ソーシャルワーカー　インテーク　アセスメント　動機づけ　取り組み能力　スキル

Ⅰ　はじめに

１　現状の研究に関する問題提起

近年、保健・医療・福祉の統合が図られ、福祉の対象者観も変わった。クライエント（以下 CL と略記する）側も自らのニーズに基づいて主体的に選択・決定することが求め

られ、それに伴い自己の責任性、自己管理も明らかにされるようになった。しかし、実際に全てのCLが主体的に選択・決定できているのかというとそうではない。問題に対して主体的に取り組む為に必要である「動機づけ」が低い、もしくは何らかの理由で「動機づけ」が持てないCLもいるのである。問題解決のための動機づけは、具体的にはCLの目標共有・課題探索のために必要な動機づけであり、病院を例に挙げると転院援助等では消極的な意味での納得や覚悟ができるようになることをも意味する。「動機づけ」については諸説あるが、本研究では「内発的なものであり、且つ行動への方向性とストレングスが明らかな問題解決への意欲」と定義する。また、動機づけの有り・無しという二者択一で考えるのではなく、CLには必ず何らかの動機づけがあることを前提にした上で、具体的な問題解決へ向けての動機づけの高低を捉えていることをあらかじめ明示しておく。その上で、問題解決への動機づけが低いCLに対しても、医療ソーシャルワーカー（以下MSWと略記する）は常にCLの主体的な選択・決定を念頭に置いて援助しようとしているため、CLの動機づけを含むCL自身の問題解決能力のアセスメントが重要になるのである。

アセスメントについては、研究者や実践者によりその定義や解釈は微妙に異なる。副田（2005:82）は、「援助を必要としている事柄や状況の全体像が描けるよう、問題やニーズを全体的に把握し理解すること、また、問題解決・ニーズ充足のためのプラン案を検討するにあたって、相談者や家族の考え方や強み（長所、よさ）、周囲の環境の利点、強み（資源の有無や支援の可能性）を理解すること」と定義しており、従来の研究では概して同様の定義をしていると思われる。しかし本論文では、アセスメントについて、問題やニーズ把握にとどまらず、CLの動機づけや問題に対する取り組み能力、その他のCL自身の力を含めて幅広く見立てる広い概念で捉えたい。

2　先行研究

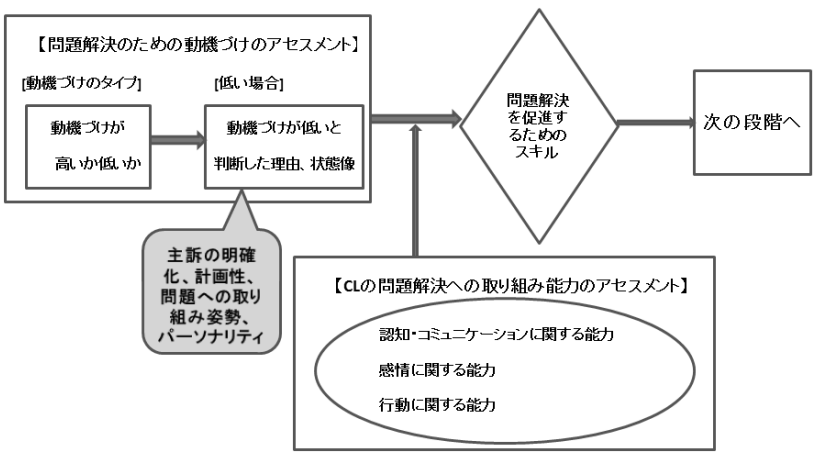
従来のアセスメント研究は、定義と同様、サービス・ニーズのアセスメントや問題のアセスメントに焦点が置かれていてCLの動機づけや問題解決能力に着目した研究は不十分であり、動機づけの低いCLに対する援助過程やスキルについては必ずしも明らかにされてこなかった。日本のソーシャルワーク研究の中で、動機づけに着目した研究は少ない。GeNii（国立情報学研究所）[1)]が提供するCiNii（論文情報ナビゲータ）で「ソーシャルワーク、動機づけ」と検索すると2件のヒットだけであったことでもそのあたりが伺える[2)]。動機づけに着目した研究として、星野（1988：49－54、1992：87－94）は唯一未来指向ケースワークにおける指向性の機能と構造を、問題解決行動をする上での動機づけに焦点を当てて検討している。保健医療ソーシャルワーク研究会（1990：133）は「初回面接において特に自ら望んで来室したのではないCLの場合、援助に対する抵抗を示す

ことがある」と述べており、抵抗を除去し、CL の動機づけを高めることが必要であると述べているが、アセスメントの仕方やスキルについては一般的な援助方法の域を出ていない。自発的に援助を求めない CL に関する研究としては、黒川（1985：171－184）がプロベーションにおける動機形成について述べているが限定的である。園木（2001）は、ある大学病院で、MSW は CL の問題解決への動機づけをどのようにアセスメントし、どのような援助を行っているのか、その援助過程とスキルを明らかにすることを目的とし、探索的な実証研究を試みている。ニーズや問題だけでなく CL 自身の力として動機づけをアセスメントしている点にリアリティがある。概観したところ日本でのソーシャルワークの方法論に関する文献には、動機づけのアセスメントについての詳細な記述はほとんど掲載されていなかった。一方、ヘップワースら（1997：255）は「クライエントの動機づけを評価し、高めることはアセスメントプロセスの必須の部分」としている。彼らは動機づけをアセスメントするために、実践者は個人と、個人の環境の知覚・認識を理解する必要があり、動機づけは実践者との進行中のインターラクション（相互作用）によって強く影響されているダイナミックな力だと説明している。さらに、実践者は初期の動機づけをアセスメントするだけでなく、ストレングスや方向性を欠いている動機づけを高める責任も負っていると丁寧に述べている。

Ⅱ　研究枠組み

本論文では、探索的な実証研究を行った園木の研究を素地とし発展させることにした。まずは園木の研究を概観する。ある大学病院で、動機づけに着目した調査研究を行い、「問題解決の動機づけが低い CL に対する援助プロセス」を導き出している（図 1）。これは、

図 1　問題解決の動機づけが低いクライエントに対する援助プロセス

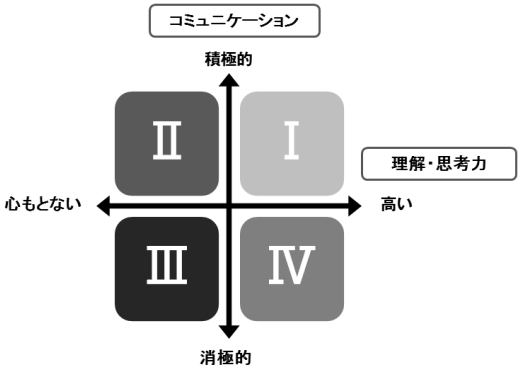


MSW が CL の動機づけというものをどのように見て、感じて、どのような CL を動機づけが低いとアセスメントしているのか、当時の調査研究から導き出されたプロセスである。結論として動機づけが高いか低いかというのは、目標共有の段階と課題設定の段階で考えられていた。例えば目標共有では、なぜ相談室に来たのか・MSW と話すことを理解していないといったもので、課題設定の部分では「転院」という課題に納得していない等であった。そして、「動機づけが低い」と判断した理由や状態像は、主訴の明確化、計画性、問題への取り組み姿勢、パーソナリティといった面から考えられていた。動機づけの低いケースは何らかの援助しにくさがある・円滑に進みにくいという研究結果を示している。

また、MSW は動機づけとは別に、CL の問題解決への取り組み能力をアセスメントし、その 3 側面（認知・コミュニケーションに関する能力、感情に関する能力、行動に関する能力）の中で CL の強み（ストレングス）を見極めたり、弱いもしくは足りない部分を把握したりして、スキルを用いて働きかけをする部分を決めているのではないか、と述べている。そして 3 側面について、MSW がアセスメントする際の指標を 4 つの象限に分けたマトリックスで図示した。そのマトリックスは以下のようなものである。

まずは 1 つめ、認知・コミュニケーションに関する能力である（図 2）。このマトリックスは、認知・理解とコミュニケーションを見ている。つまり、認知・理解というのは MSW が何らかの説明をした時にどのように理解しているかということで、コミュニケーションというのは面接の時の会話・発言が積極的か否かということである。第 I 象限にあてはまる CL は、MSW が説明したことをきちんと理解し、且つコミュニケーションが積極的でわからないこと等はきちんと質問できるような CL であり、第 II 象限にあてはまる CL は、MSW が説明したことへの理解は心もとないものの、コミュニケーションは積極的という CL である。第 III 象限にあてはまる CL は、MSW が説明したことへの理解が心もとなく、さらにコミュニケーションも消極的な CL であり、第 IV 象限にあてはま

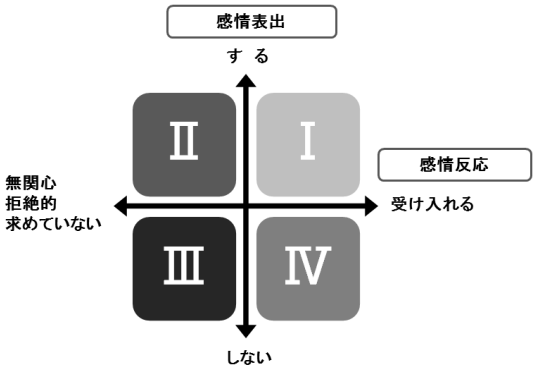
図 2　認知・コミュニケーションに関する能力



るCLは、MSWが説明したことをきちんと理解し、コミュニケーションは控えめというCLである。

次に2つめ、感情に関する能力である（図3）。このマトリックスは感情反応（情緒反応）

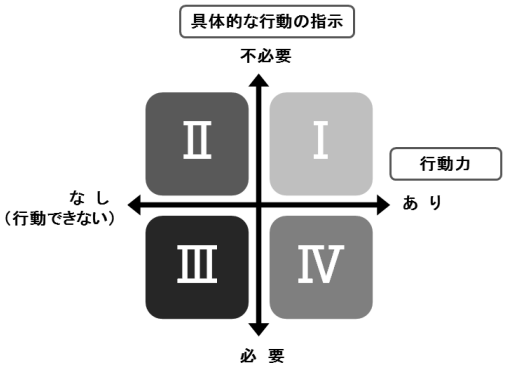
図3　感情に関する能力



と感情表出について見ている。感情反応というのは他者であるMSWがCLの感情に働きかけた時にどのように反応したかということで、感情表出というのは、CL自らが自分の感情を表出するか否かということである。これはMSWからの感情を好意的に受け取るか、それとも無関心もしくは拒否するという感情面の反応を見るためのものである。第Ⅰ象限にあてはまるCLは、感情表出もするしMSWからの感情に対しても好意的に受け取るCLであり、第Ⅱ象限にあてはまるCLは、感情表出するがMSWからの感情に対しては無関心、もしくは拒絶的かそういうものを求めてないCLである。第Ⅲ象限にあてはまるCLは、自分から感情表出しないし、MSWからの感情に対しても無関心もしくは拒絶的かそういうものを求めてないCLであり、第Ⅳ象限にあてはまるCLは、自分からの感情表出はしないが、MSWからの感情に対しては好意的に受け取るCLである。

最後に3つめ、行動に関する能力である（図4）。このマトリックスはCLの行動力の

図4　行動に関する能力



有無とMSWからの具体的な行動の指示の必要性の有無を見ている。CLは皆何かしらの行動力はあるという前提に立ってはいるのだが、これはMSWが予想した行動をとるかとらないかということである。MSWの指示通り動かないCLが悪いという評価をしているのではなく、常識的に予想の範囲の行動をとるかどうかである。また、具体的な行動の指示というのは、何かしらMSWは次の行動を説明する場合があるが、通常の説明の類ではなく、手取り足取り詳細な行動の指示が必要かどうかということである。第Ⅰ象限にあてはまるCLは、具体的な行動の指示がなくても自力で行動できるCLであり、第Ⅱ象限にあてはまるCLは、具体的な行動の指示が何らかの理由で不要であり、行動ができない、もしくは行動したとしてもMSWが予想した行動は取らないCLである。第Ⅲ象限にあてはまるCLは、具体的な行動の指示が必要で、指示をしたとしても行動に移せない、もしくはMSWとCL双方が合意したはずなのに全く異なるような行動をとり、双方が目標としていた行動をしないCLであり、第Ⅳ象限にあてはまるCLは、具体的な行動の指示があれば行動へ移せるCLである。以上がCLの問題解決への取り組み能力3側面のマトリックスである。

次に「スキル」についてである。MSWとCLがコミュニケーションを取る際には必ずスキルが媒介する。スキルを研究することで、MSWがどのような判断基準で、実際にCLの人となりや直面している問題、潜在的な問題、現在の状況などを判断し援助しているのかがおのずと現れるだろう。スキルには様々な概念があるが、園木は「援助の遂行において用いられるソーシャルワーカー側の行動」という大きな枠組みで捉えており、調査から85項目のスキルを抽出している。本研究で使用する「スキル」は、園木の研究と今回、調査の前に行った予備調査から導き出したMSWのインタビューから抽出したものであり、双方変わらない内容で85項目あった。紙面の都合上85項目のスキルについては掲載しないが、ここでは具体的にMSWが行っていることを「問題解決のためのスキル」とし、85項目を13グループ化[3)]したものを掲載する（図5）。園木の研究では動機づけの低いCL、つまりは円滑に進まないと感じるケースの場合には、用いるスキルの傾向が異なるのではないか、スキル量が多いのではないかという仮説が生成されていた。また、過去から現在、そして未来という「時間軸」がCLのアセスメントにおいて大事な要素であるとしていたが、そのことについて深められたり言語化されたりはしてはおらず不十分であった。

図5　スキルのグループ化

1. 受け止め（あいづち、沈黙、励ましなど）　：5項目
2. 情報提供・説明　：10項目
3. 助言・提案・促し・指示　：5項目
4. 論理的帰結　：2項目
5. 待機　：3項目
6. 現状確認　：20項目
7. 過去の振り返り　：5項目
8. 将来のイメージ・見通し作り　：4項目
9. 相談内容の焦点化　：7項目
10. 目標・課題の明確化　：3項目
11. SWの自己開示　：1項目
12. 環境・役割確認　：4項目
13. CL以外の環境への働きかけ　：16項目　　計85項目

Ⅲ　研究目的

以上が園木の研究の概要である。この枠組みはニーズや問題のアセスメントにとどまらず、CL という人間理解のアセスメントの一助となり有効だと考え、本研究でもこの枠組みを踏襲することにした。園木の研究は 1 つの大学病院 MSW の例を挙げ研究しているため一般化することはできない。また、取り組み能力のマトリックスとスキルについても仮説探索、生成の端緒で終わっていた。そこで本研究では、園木の研究から導き出された 2 つの仮説を生成できるのか試みることにした。今回調査した機関も大学病院という急性期の病院のため、同じ機能の病院であり仮説生成、確認（検証まではいかない）には適していると考える。「仮説 1」は、取り組み能力のマトリックスについてである。MSW は各取り組み能力の第Ⅰ・Ⅳ象限にチェックがつく場合は円滑なケースと判断し、第Ⅱ・Ⅲ象限にチェックがつく場合は円滑に進まないと感じている。そして「仮説 2」はスキルについてである。MSW は円滑に進むと判断したケースと円滑に進まないと感じたケースとでは、円滑に進まないと感じたケースに、よりスキルを多用している。本研究の調査ではこの 2 点の仮説生成、確認作業を行っていく。

1　予備調査

まず、園木の枠組みが本当にベースとなる研究となるのか確認するため、予備調査を行った。経験年数の長い 3 人の SW（10 年、13 年、19 年目）に半構造的インタビュー調査で平成 20 年度 1 年間を振り返り、援助プロセスが円滑に進まないと感じたケースを挙げてもらった。そしてケース概要、どのような CL だったのか、援助過程はどのようなものであったか等自由に語ってもらった。この予備調査を行ったのは、動機づけの低さと円滑に進まないと感じたケースの関連性を確認する作業である。あえて「動機づけ」については尋ねず、インテーク場面で MSW は何をもって円滑に進む／進まない、の判断をしているのかを分析することにし、理論的枠組みの体裁を取らなかった。これは動機づけの低いケースが援助しにくい・円滑に進みにくいという園木の研究結果を双方向から検証するためである。何をアセスメントしているのかと同時に、どのようなスキルを用いてアセスメントしているのかを検証したかったため、それがより明確になる円滑に進まないと感じたケースについてまず MSW にインタビューした。その結果、予備調査からは、円滑に進まないケースと判断した理由の一例として、独自の解釈をし、MSW と合意したはずの行動をしない、優柔不断、思い込みが激しい、他罰的で攻撃的、依存心が強い、自己中心的で話が核心部分にいかない、困っているのに行動に移せない、病状理解しておらずキョトンとしている、楽観的で他人任せ、期待が高く現実とのズレがある等が明らかとなった。これらの CL 像は園木の研究の動機づけの低い CL 像と全て一致した。

2　4つの仮説

ベースとなる研究との齟齬がないことがわかったため、実際のところMSWはCLをどのようにアセスメントしているのか、MSWがアセスメントしているのは問題やサービス・ニーズのアセスメントだけではない、より実践に即したアセスメントとスキルの実際を整理し明らかにできるのではないかと考えた。また、予備調査をしたことで、前述した2つの仮説生成だけでなく、新たな仮説が浮上した。予備調査では、経験年数の長いMSWに円滑に進まないと感じたケースについてインタビューをしたが、これが新人MSWの場合どうであろうか。経験年数によってスキル活用に違いが出る[4)]という「仮説3」を生成した。さらに、園木の研究では「時間軸」が大切だとしていたが、予備調査でも同様に時間軸について話が及んだ。これにより「仮説4」として、経験の長いMSWはCLの動機づけや問題解決への取り組み能力だけでなく他の面もアセスメントしているという仮説を生成した。

以上、本研究では、園木の研究で一つの病院での仮説にとどまっていた仮説1、2の生成・確認作業を行う。「仮説1」は取り組みマトリックスについて、MSWは各取り組み能力の第Ⅰ・Ⅳ象限にチェックがつく場合は円滑なケースと判断し、第Ⅱ・Ⅲ象限にチェックがつく場合は円滑に進まないと感じる。「仮説2」はスキルについて、MSWは円滑に進むと判断したケースと円滑に進まないと感じたケースとでは円滑に進まないと感じたケースによりスキルを多用する、というものである。さらに今回新たに仮説3、4を調査から生成することを目的とする。「仮説3」は、経験年数によってスキル活用に違いが出る。そして「仮説4」は、経験の長いMSWはCLの動機づけや問題解決への取り組み能力だけでなく他の面もアセスメントしている。以上、4仮説を生成・確認していきたい。

Ⅳ　調査方法

1　調査対象と調査方法

本調査の協力者はある大学病院MSW5名である。全員社会福祉士、内3名は精神保健福祉士も取得済み。経験年数は19年目、13年目、10年目、1年未満の新人が2人である。予備調査の結果、動機づけの低いケースと円滑に進まないと感じたケースのクライエント像が一致したため本枠組みを使用して問題ないと確認できた。そのため、これを基にインテークシートを作成した。そして、5人のSWは平成21年3／1～4／30までの2ヶ月間インテークした102ケース＋予備調査で挙がった13ケース、計115ケースについてインテークシートを面接後に記入した。

インテークシートは2枚である。インテークシート1枚目は取り組み能力のマトリックスが中心となる。担当MSW、転院・経済問題・制度活用・療養上の生活問題・家族問

題・その他の援助内容のチェック、援助のしにくさがあった、もしくは円滑に進まないと感じたかどうかのチェック、そして円滑に進まないと感じた場合にそのように考える理由、どのようなCLだったのかを記載した。そしてインテーク時に感じたCLの取り組み能力のマトリックスにそれぞれチェックした。このマトリックスは園木の論文上で提示されたものを修正・加筆した。

インテークシート2枚目はスキルチェック票である。5人のMSWが園木の研究で抽出された85項目のスキルと、その85項目を13グループ化したものを確認し、自分が使っているスキルが網羅されていることを事前に確認した。このスキルチェック票では、まずMSWが使用した項目スキルに全てチェックする。さらに、この13グループの中でMSWが自身で特に効果を狙って意図的に使ったと思うスキルの大番号にチェックをする。これは複数回答可とした。

2　倫理的配慮

調査に際しての倫理的配慮についてであるが、調査協力者へのインタビューの際は、個室で行い個人情報には留意し守秘義務を守る約束で行った。また、インテークシート記入調査の際は、個人が特定できる情報は一切調査項目に含めず、インテークシートを記入した当人でさえ後から読んでも、どのケースかわからないようにした。筆者が調査した機関には倫理委員会が設置されておらず、このようなインタビュー調査／質問紙調査について審査する委員会はないため、MSWの管理職である所属長に研究内容について説明し許可を得た。

Ⅴ　調査結果

1　取り組み能力のマトリックス

取り組み能力に関する調査結果は、115ケース中、円滑に進むと感じたケースは70ケース、円滑に進まないと感じたケースは45ケースであった。円滑に進むケース（n＝70）の内訳を以下に記載する（図6）。認知・コミュニケーションに関する能力は、第Ⅰ,Ⅳ象限が86％で、第Ⅱ,Ⅲ象限は14％であった。感情に関する能力は、第Ⅰ,Ⅳ象限が99％で、第Ⅱ,Ⅲ象限は19％であった。行動に関する能力は、第Ⅰ,Ⅳ象限が94％で、第Ⅱ,Ⅲ象限は6％であった。次に円滑に進まないと感じたケース（n＝45）の内訳である（図7）。認知・コミュニケーションに関する能力は、第Ⅰ,Ⅳ象限が33％で、第Ⅱ,Ⅲ象限は67％であった。感情に関する能力は、第Ⅰ,Ⅳ象限が56％で、第Ⅱ,Ⅲ象限は44％であった。行動に関する能力は、第Ⅰ,Ⅳ象限が64％で、第Ⅱ,Ⅲ象限は36％であった。

図 6 円滑に進むと感じたケース（n=70）

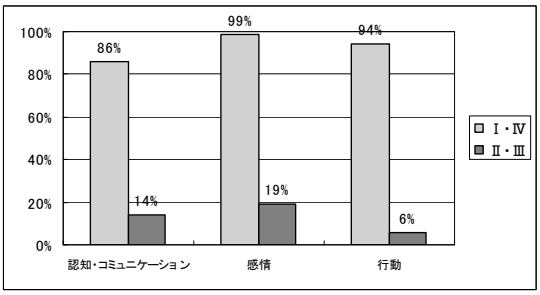
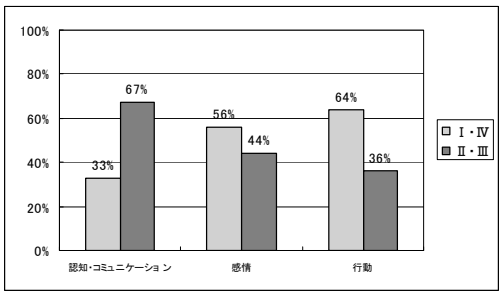


図 7 円滑に進まないと感じたケース（n=45）



この結果は「仮説 1」の生成ができたと言える。比較すると、円滑に進むケースは第Ⅰ・Ⅳ象限にチェックがつくことが多く、円滑に進まないと感じるケースは第Ⅱ・Ⅲ象限にチェックがつくことが多かった。園木の研究で第Ⅰ・Ⅳ象限を CL の強み（ストレングス）と認め、円滑にケースを進めるポイントにしていることが確認された。

2　スキル数の結果

次に、スキルの数の結果である（表 1）。表 1 のとおり、ほとんどのスキルにおいて円滑に進まないと感じているケースのほうにスキルを多用していた。この結果で、「仮説 2」の検証ができたことになる。さらに経験年数での比較では、経験の長い MSW は円滑に進むケースよりも円滑に進まないと感じたケースにスキルを使い、新人 MSW は円滑に進まないと感じたケースより円滑に進むケースにスキルを多用する正反対の結果で顕著な違いが現れた。

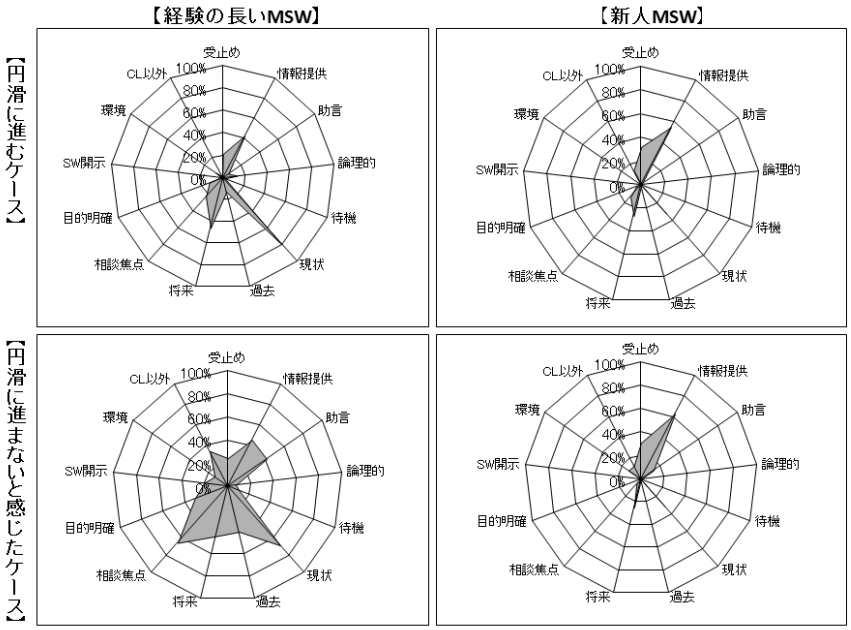
表 1　円滑に進むケースと円滑に進まないと感じたケースのスキル数の結果

		受止め	情報提供	助言	論理的帰結	待機	現状	過去	将来	相談焦点	目的明確	SW自己開示	環境	CL以外
円滑に進むケース	経験長いMSW	3.08	6.25	1.1	0.96	0.15	12.8	3.73	2.31	1.88	0.85	0.23	2.25	5.06
	新人MSW	2.27	3.77	1	1.14	0.27	9.54	1.68	1.55	0.91	0.55	0.05	1.91	3.36
円滑に進まないと感じたケース	経験長いMSW	3.45	6.55	3	1.38	0.69	14.4	3.86	2.07	3.52	1.72	0.45	2.38	6.83
	新人MSW	1.63	4.25	0.75	1.06	0.25	8.13	1.5	0.94	1	0.25	0.06	1.5	3.19

3　経験年数によるスキル使用の違い（特に効果を狙って意図的に使ったスキル数の結果）

ここまでは、単純に使用した 85 項目のスキルの数の比較をしてきた。次に、その中でも特に効果を狙って意図的に使ったスキルを比較、経験者と新人とをレーダーグラフで対比した（図 8）。経験の長い MSW は、円滑に進むケースの場合、特に「現状確認」、「将来のイメージ作り」、「情報提供」この 3 点を中心に使っている。新人 MSW は、「受け止め」と「情報提供」を中心に使っている。そして円滑に進まないと感じたケースについては、経験の長い MSW は、「現状確認」や「過去の振り返り」、「相談内容の焦点化」、「将来の

図８　経験の長い MSW と新人 MSW のスキル比較



イメージ作り」等を使い、スキルの幅が広がっている。一方の新人MSWは、円滑に進むケースとあまり変わらないスキルの幅となっており、情報提供に終始している感が否めない。そもそも新人はスキル量が少なく、円滑に進むケースと円滑に進まないと感じたケースの差がほとんどなく、どちらかというと円滑に進むケースに偏りがちという結果が出た。新人の頃は余裕がなく、どうしても制度や資源で頭がいっぱいになってしまうものである。それがこの結果で表れたと思われる。これにより「仮説 3」について明らかにされた。

４　経験年数の長い MSW のアセスメント

以上の結果から経験年数でスキルの幅が異なることが明らかになった。経験の長い MSW のスキルの幅が広いということは、CL のアセスメントも幅広く行っていると考えられる。そのためここからの調査結果の分析として、仮説４の検証を目的にするため、経験年数の長い MSW の分析をする。

円滑に進むケースは「現状確認」「将来のイメージ作り」「情報提供」の３点に集中していることがわかった。円滑に進むケースは、まず「現状確認」して、次に「将来のイメージ作り」「情報提供」とスムーズに進み、円滑に進まないと感じたケースは、まず「現状確認」をして、CL の置かれている状況、考え方をとらえながら CL が未来と過去のどちらを向いているのか、現状にとどまっているのか、その志向性のアセスメントをした上でその後の面接の流れを作っていることがわかった。園木の研究で漠然と CL の時間軸

と捉えていたものは、CL の志向性のアセスメントだと言うことができる。例えば過去の振り返りをしなければ前に進めないと思えば過去の振り返りを丹念に使い、相談の焦点化を行った方がよいと判断すればそれを使うというバリエーションがあることがわかった。また、過去の振り返りの中でも CL が今までの経験からどのような対処方法を使ってきたか、CL 独自のコーピング方法を教えてもらう等、CL の経験を読み取り、課題の対応方法に役立てることもあった。

次に、キーになる「現状確認」のスキル項目をいくつか掲載する。「病状説明されていればその内容の捉え方を尋ねる」「病気の捉え方について尋ねる」「現状の理解、把握をどのようにしているか尋ねる」「転・退院についてどのように思っているか尋ねる」「生活スタイルの変化に対する思いに探りを入れる」「CL が一番中心に考えていることを尋ねる」「CL なりの不安、負担軽減の対処法を尋ねる」「CL の置かれている状況の要約」「リハビリやケアの様子を見てもらうことで現実を目の当たりにしてもらう」等これは一例で、このスキル項目は実際 MSW の言葉から拾った項目のため、統一性はないが現実に即していると思われる。以上のような、「現状確認」をして、CL が置かれている状況、考え方をとらえながら志向性のアセスメントをしている。このように経験の長い MSW は CL の動機づけや問題解決の取り組み能力だけでなく、CL の志向性もアセスメントしていることが明らかになった。従来、何となく実践現場において経験知で行っており、時間軸に関係することまでわかっていたが、今回「CL の志向性」と言語化できたことになり、「仮説 4」を生成したことになると考える。

Ⅵ　考察とまとめ

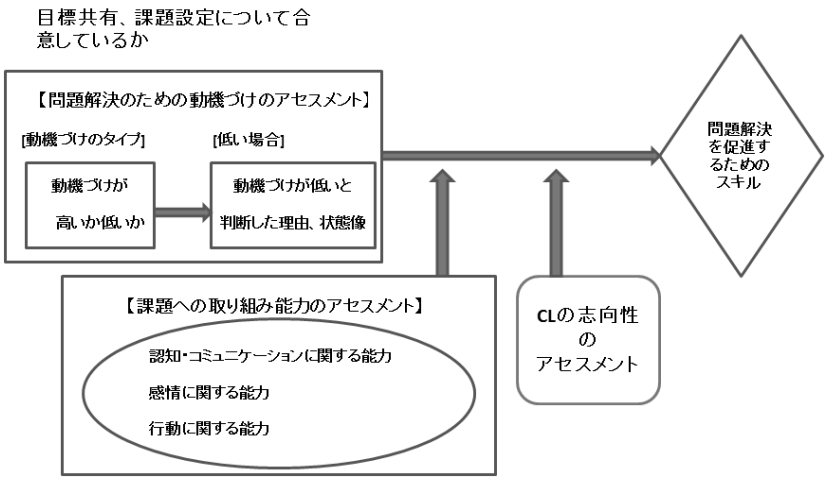
本研究では、まず問題関心を先行研究も交えて論じ、その中から実践に即した研究である園木の研究を研究枠組みとし概観した。研究目的として、仮説 1 と仮説 2 は園木の研究を、大学病院 MSW の面接導入部分におけるアセスメントとスキルとして、仮説が仮説として成立するのかを確認するために、ある大学病院で仮説生成･確認作業を行った。さらに、予備調査を踏まえて新たに仮説 3 と仮説 4 も仮説として成立するのか確認する作業を行った。調査の結果、仮説 1 と仮説 2 が成り立つことが確認でき、仮説 3 と仮説 4 についても仮説生成ができたと考えている。但し、この 4 つの仮説が生成及び検証されたと結論づけるのはまだ早く、さらに多くの例数によって仮説検証がなされるべきだと考える。

その上で今の時点での調査から導き出された部分のアセスメントの実際を図 9 に示した（図 9)。この図は必ずしも左から順番にというわけではなく微妙なずれはあり、同時並行的にアセスメントしていることもある。今回の調査から、経験の長い MSW は、CL

の取り組み能力を見立てながら CL の志向性をアセスメントした上でスキルを使用していることが明らかになった。CL が過去にとらわれていればいくら制度や転院の説明をしてもスムーズに応じてこないのは当然であろう。CL によっては、患者である夫への過去の恨みを MSW の前で 30 分以上話さずには先に進めないという人もいる。しかし話し尽すと、こちらが提示した課題にはすっきりと納得する場合もある。このように現場で何となくわかっていた CL に関する時間軸を「志向性」と言語化できたことは意義があると考える。

今回の調査で、MSW は CL の取り組み能力を複合的にアセスメントしながら、CL の置かれている状況に寄り添うために、「現状確認」のスキルを使用し、同時並行的に CL の志向性をアセスメントしていることが分かった。特に経験の長い MSW は問題やサービス・ニーズのアセスメントという側面だけではなく、CL という人間理解のために動機づけや問題解決への取り組み能力、志向性という「クライエント力」のアセスメントをきめ細やかに行っていることが明らかになった。

図９　『クライエント力』のアセスメントの一部



Ⅶ　本研究の意義と今後の課題

先行研究では、インテーク場面でのアセスメントやスキルを実証的に研究したものが少なく、その点に着目し、発展させたことは意義があると考えている。また、実際に行っているアセスメントを整理したことで実践家、特に新人 MSW がスキルをより意図的に使い、アセスメントの実際を振り返ることができるようになると考えている。経験の長い MSW と新人 MSW のスキルの違いを比較できるように可視化したことで、今後の研

究によっては新人教育の一端を担えるのではないかと考えている。

本研究は、園木の研究を発展させたことで、2つの大学病院MSWにおける調査研究結果となったが、直ちに結果を一般化することはできない。また、研究倫理上CLを特定できないような形でMSW側からの調査とした。MSWの主観、感覚でCLを捉えているため、CL側の実際はわからない。MSWの指示に的確に従うことができるクライエント以外は「動機づけが低く」「援助が円滑に進まない」と短絡的に考えているのではなく、MSWが実際どのように複合的にCLをアセスメントしているのかということを明らかにしたかったため、このような手法になった。しかし、MSWがCLのどこに働きかけようと考えているのか、コミットする場所を探し、クライエント力を見出す努力をしていることが明らかになったと思われる。機会があれば、CL側のインタビュー調査なども行いたい。

【注】

1）Genii の検索サイト　http://ge.nii.ac.jp/genii/jsp/index.jsp

2）そもそもGeNiiが提供するCiNiiで「ソーシャルワーク､アセスメント」でのヒット件数は2010.1.29現在で70件、「ソーシャルワーク、スキル」でのヒット件数は32件と少ない。この中で実証的な研究がさらに少ないことは言うまでもない。

3）面接におけるスキルは、観察技法やコラボレーション技法などさまざまであるが、今回は面接における言語スキルを中心に検討した。この85項目のスキルは、かなり細かく具体的な内容である。そのため、援助内容が異なってもスムーズでないと感じるCLに対してどのようなスキルが使われているかを明らかにするためにスキルのグループ化をし、スキルを比較することができるようにした。このグループ化は、社会福祉援助技術論やアレンE.アイビイのマイクロカウンセリング（1985）等のスキルの分類を参考にし、時間軸を入れ筆者が作成した。

4）経験年数での力量の比較については、保正（2005：27-41）が行っており、経験年数により専門的力量に関する共通部分と共に差異も存在することを明らかにしている。保正によると、教育学分野ではこのような研究がなされているとのことだが、社会福祉領域、医療ソーシャルワーク領域においては、筆者が知る範囲では、筆者が取り組んでいるテーマやスキルに関しての経験年数による比較は見受けられなかった。

【参考文献】

・副田あけみ（2005）『社会福祉援助論　ジェネラリスト・アプローチの視点から』誠信書房

・星野有史（1988）「未来指向ケースワークに関する試論的研究－概念的枠組みの検討－」『ソーシャルワーク研究』14（1）、49～54ページ

・星野有史（1992）「ソーシャルワーク実践の概念化に関する今日的課題―概念的枠組みの整理検討―」『ソーシャルワーク研究』18（2）、87～94ページ

・保健医療ソーシャルワーク研究会（1990）『保健医療ソーシャルワーク・ハンドブック　理論編』中央法規

・黒川昭登（1985）『臨床ケースワークの基礎理論』誠信書房

・Dean H. Hepworth & Ronald H. Rooney & Jo Ann Larsen（1997）Direct Social Work

・Practice Theory & Skills, Pacific Grove, CA : Brooks / Cole, Fifth Edition.

・園木葉子（2001）「動機づけが低いクライエントに対する援助過程とスキル－K大学病院を事例に－」東京都立大

学大学院社会科学研究科社会福祉学専攻平成 12 年度修士論文
・保正友子（2005）「ソーシャルワーカーの専門的力量についての予備的研究－同一事例に対する若手とベテランのコメント比較に基いて－」『社会福祉実践理論研究』第 14 号、27 ～ 41 ページ
・アレン .E. アイビイ　福原真知子ら訳（1985）『マイクロカウンセリング～学ぶ－使う－教える技法の統合：その理論と実際』川島書店